

2 章 2016 年度 COC 事業による「教育」

コラボ教育

継続看護・訪問看護教育

大学院教育

COC事業における教育改革

- 地域貢献活動の一部を教育課程に取り入れ、市内で高齢化率の高い地域で授業を展開する。
- 継続看護を実践する専門看護師を招聘し、継続看護に関する基礎を学び、看護実習において継続看護の実践を学ぶ内容にする。
- 訪問看護の知識、理解を深めるために、在宅看護分野の講義、演習、実習の時間数を拡大、内容を充実させる。
- 医療機関や多職種連携を推進できる教育プログラムを開発する（大学院生対象）。



(人材育成像 卒業後の学生のイメージ)

1. 地域住民の暮らしを理解できる看護師
2. 病院や施設でのケアと在宅ケアの接続を計画・実行できる看護師
3. チーム医療のコアとなる専門看護師（大学院生対象）

カリキュラムマップ

| | |
|-----|---|
| 大学院 | 異なる医療機関、医療機関と地域との連携を学修(4科目) |
| 4年生 | 健康づくりのための個人、地域社会への働きかけ、継続看護と訪問看護における知識・技術の統合(4科目) |
| 3年生 | 健康維持・改善への援助、継続看護や訪問看護における理解と援助の実践に関する技術の修得(9科目) |
| 2年生 | 住民の健康や生活をアセスメントし、住民の暮らしに応じた看護技術の修得(5科目) |
| 1年生 | 健康の概念や地域特性に関する基礎的知識の修得(3科目) |

1. コラボ教育

住民の方との「コラボレーション（協働作業）」による教育として、平成21年度より、地域住民の方が「教育ボランティア」として、概論・演習科目において模擬患者になっていただいたり経験談を語っていただいたりする講義を開講している。本事業では、卒業生全員が「地域住民の暮らしを理解する」ために、より住民の暮らしに近い場所で、住民に参加いただく授業を平成26年度より須磨区北部において開講している。

2016年度のコラボ教育

| 実施日 | 科目名 | 対象学年・人数 | 住民参加人数 |
|-------------|-------------|----------------|------------------|
| 5月10日～6月14日 | 基礎看護技術演習Ⅲ | 2年生・93人 | 172人 (のべ242人) |
| 5月12日 | 健康行動論 | 4年生・22人 | 7人 |
| 5月30日 | 健康学習論 | 3年生・16人* | 10人 |
| 10月5日 | 基礎看護技術演習Ⅰ | 1年生・95人 | 28人 |
| 12月20日 | ヘルスプロモーション論 | 1年生、編入3年生・101人 | 30人 |
| 2月13日～24日 | 健康生活支援学実習 | 2年生・16人* | 16人 |

*履修者のうち、須磨区北部で演習・実習を行なった学生数

各コラボ教育の概要

【基礎看護技術演習Ⅲ】

- ◆ 教育内容：地域住民にヘルスインタビューと健康測定（「栄養系」「運動系」のいずれか）を実施し、対象者の生活と健康状態の関連について考察する。
- ◆ 対象学年・履修者数：2年生（必修・2単位）・92人
- ◆ 演習日：2016年5月10日（火）、12日（木）、17日（火）、19日（木）、6月2日（木）、7日（火）、9日（木）、14日（火） 計8回
- ◆ 演習場所：須磨区竜が台地域福祉センター、菅の台地域福祉センター
- ◆ 住民参加人数：のべ242人（実人数172人）
- ◆ 学習課題：健康測定・インタビューに関する記録用紙（観察・測定した事実や情報収集した内容を整理して記載できる）、レポート「地域住民の生活と健康状態や健康に対する考えとの関連について考察する」。
- ◆ 学習の成果
 - 評価：「良く達成できた」35.9%、「達成できた」42.4%、「まあまあ達成できた」18.5%、「あまり達成できなかった」3.3%
- ◆ 参加住民の感想（一部抜粋）
 - <自分の健康状態がわかってよかった>
 - ・自分の健康の度合いが少しでもわかって良かった。
 - ・あまり数値を気にしないで生活していたので、このように数字で自分の身体の事を知れてよかった。
 - ・良し悪しはともかく、自分の健康に気を付けていきたい。次回も参加したい。
 - <学生のがんばる姿に触れてよかった>
 - ・若い人たちと話ができてよかった。
 - ・若い方々が元気よく頑張っていて好感が持てた。
 - ・学生さんの今後の活動、勉強に少しでも役に立てたかなと思った。
- ◆ 学生の感想（一部抜粋）
 - <「伝える」ことの難しさに気づいた>
 - ・測定結果の意味を聞かれたが、説明がうまく伝わらなかった。学生同士ではお互いに

理解しているつもりだったが、準備をもっとしっかり行い、伝わる説明かどうかを確認していればよかった。

- ・耳の遠い方もおり、普通に話したつもりが相手の方には聴こえていない時もあった。
- ・高齢者の方から自分が学ぶことの方が多く、接し方、話し方も今まで思っていたのと違い、自分の話し方を見直す機会になった。

<知識の必要性を実感した>

- ・血圧測定は測り直してもうまくいかず、住民さんに不安を与えてしまった。もっと練習して自信をもって行えるようにし、対象者に不安を与えないようにしたい。
- ・測定値が標準よりも低い方に、どのように説明したらよいか言葉が思い浮かばず、知識不足を感じた。

<「聴く」姿勢が大切>

- ・話す内容や流れを考えていたが、住民さんの方からたくさん話をしてくださった。住民さんが自分から話せるように流れを考えたいと思った。
- ・自分たちは一日の過ごし方から聞いていったが、住民さんは自分のしていた職業に誇りをもっており、そこから話を膨らませてくださった。その方が得意なことや誇りに思っていることから既往歴へと、自然と話を聞くことができた。その方が大切に思っている部分から病気や生活について話を聞いていくとよいと思った。

<住民の健康意識について知った>

- ・住民さんは「特別なことは何もしていない」と言われたが、毎日かなりの距離を歩いておられた。その方にとって、歩くことは特別な運動ではなく、普通の事として身につけていることに驚いた。
- ・住民みんなが自分の普段の血圧を知っており、健康について意識していると感じた。

◆ 担当教員の感想

今回の演習は、学生にとって学外で地域住民の方にインタビューや測定を行う初めての機会であった。ヘルスインタビューは、地域住民の生活や健康状態について知ることを目標とし、住民1名に対して学生2名で実施させていただいた。学生は生活に焦点を当てながらインタビューを行うことで、住民の方から自らの生活や考えについての話を聞くことができていた。そのため、学生は自分達とは年代の異なる住民の方々が、どのような日常生活を送っているのかを知ることができ、自分たちがイメージしていたよりも住民の方々の健康への関心が高いこと、生活の中で無意識に行っていることも健康につながっていること等を学ぶことができていた。

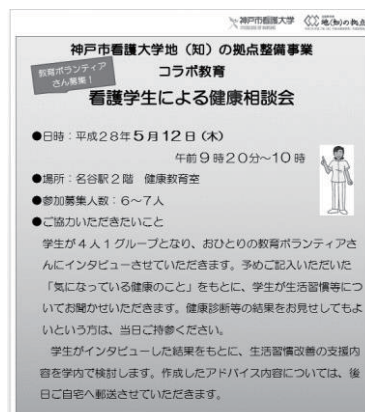
健康測定に関しては、測定ブースに来られた方に対して、学生が交代で測定を実施した。学生同士で行う時とは異なり測定結果も幅広いため、学生は、安全に測定するだけでなく、測定方法や結果をどのように伝えていくとよいのかを考えながら実施することができていた。さらに、待機ブースで健康に関するチェックリストを記入している住民の方にも積極的にしかかわることができ、高齢者の生活や考え方の多様性に触れる機会にもなっていた。

(基盤看護学領域基礎看護学分野・講師 玉田雅美,

地域連携教育・研究センター・助教 石井久仁子)

【健康行動論】

- ◆ 教育内容：人々の行動がいかに関係に影響を及ぼしているか、その健康行動に関連する要因は何か。住民の方の気になる健康状態についてお聞きし、どのような生活習慣が関連し、看護職者として支援していく方法を様々な理論を用いて考える。
- ◆ 対象学年・履修者数：4年生（選択／保健師必修・1単位）・22人
- ◆ 演習日：2016年5月12日（木）
- ◆ 演習場所：須磨区北須磨支所保健福祉課事業室
- ◆ 住民参加人数：7人
- ◆ 学習課題：事前に健康に関して気になることをお聞きし、3~4人でグループをつくり1人の住民の方の健康相談を行う。相談内容をもとに、健康行動理論を用いて生活習慣改善の支援について提案する。レポートで「人々の健康を志向する能力を高めるうえで、どのような支援を行うことが重要か、演習での実践を通して考える」
- ◆ 学習の成果：総合成績；A評価 20人、B評価 2人
レポート点；平均 80.8/100点



教育ボランティアへのチラシ

<学生の感想>

「インタビューをして健康課題を見つけたとき、それに対する情報収集を行っていく必要性を感じた」

「健康行動理論に当てはめたアセスメントを行うことで、健康状態や課題への理解が深まる」

- ◆ 教育ボランティアのコメント：

「健康インタビューを受けて、時には専門家の話を聴いてみようと思った」

「色々、自分の生活状態を聞かれて、見直すことができました」

- ◆ 担当教員の感想：

昨年度から開始した健康行動論のコラボ教育を、今年度は事前に健康で気になっていることを事前にお聞きしたうえで、学生はどのような生活習慣が望ましいのかを調べてから、当日の健康相談を行うこととした。年齢と性別だけの限られた情報をもとに、40分という時間の中、家族構成や医師との関わりなどをお聞きするという演習となった。わずかな演習時間ながらも、授業最終の発表では変化のステージモデルやヘルスビリーフモデルなど、健康にむけてどのような資源や支援をうまく活用するべきか、複数の理論を組み合わせアセスメントすることができていた。（担当 加藤憲司，相原洋子）

【健康学習論】

- ◆ 教育内容：公衆衛生看護で対象となるあらゆる世代に向けた健康教育・健康学習の一連の過程を学習することを目標とし、「企業の従業員」「成人向け健康づくり参加者」「地域の高齢者」を想定した健康教育を企画・運営・評価する。
- ◆ 対象学年・履修者数：3年生（選択／保健師必修・1単位）・47人（うち16人須磨区）
- ◆ 演習日：2016年5月30日（月）

- ◆ 演習場所：須磨区北須磨支所保健福祉課事業室
- ◆ 住民参加人数：10人（学内の教育ボランティア参加数との合計は32人）
- ◆ 健康教育のテーマ：
 - ・神戸市のIT企業の従業員対象；「ちょっと一休み！仕事で感じる『体の疲れ』を減らしてみませんか？ー仕事の合間に「簡単ストレッチ」でストレス解消」
 - ・地域在住の30～60代男女対象；「ぐうぐうぐう zzz・・・ん？？そのいびき、もしかして、睡眠時無呼吸症候群？！早速（S）明日（A）からしてみよう（S）。あまり知られていない睡眠時無呼吸症候群のあれこれ教えます！」
 - ・地域在住の65歳以上、過去に転倒歴のある方対象；「貯筋していますか？～介護の始まりは転倒・骨折」
- ◆ 学習の成果：総合成績；A評価 16人（総合平均点88.5/100点）
- ◆ 教育ボランティアからの評価
 - 健康教育として役立つことはあったか？・・・10人
 - 健康教育発表会に参加しての満足度・・・「満足」2人、「やや満足」4人
 - 参加しての意見・感想
 - 「毎年、筋力が低下していくので毎日無理をしないで少し動かそうと思う」
 - 「これからますます高齢化が進みますが、様々なテーマを見つけて私たちに発信してください」
- ◆ 担当教員の感想：

今年度2回目となる、須磨区での健康学習論となった。グループ数も3グループとし、健康教育の対象も高齢者に限らず、壮年期や企業社員を対象とするなどに変更した。コラボ教育に初めて参加される方が半数近くいらしたが、学生と一緒に体操をしたり、健康教育の内容をメモしてくださり、今後も参加したいという意見もいただいた。学生も学内の事前デモンストレーションでは、発表にあたり知識が十分でないなどの指摘を受けながら、その後住民の方が関心を持っていただき、理解できるようにと工夫をして当日発表を行うことができていた。（須磨区担当 相原洋子）

【基礎看護技術演習Ⅰ】

- ◆ 教育内容：「睡眠を見直そう」をテーマに、人にとっての睡眠の意義や生体リズムについての講義を50分行った後、毎日の過ごし方やよく眠るための工夫などについて学生と住民さんで意見交換を行う。
- ◆ 対象学年・履修者数：1年生（必修・1単位）・95人
- ◆ 演習日：2016年10月5日（水）
- ◆ 演習場所：須磨パティオホール
- ◆ 住民参加人数：28人
- ◆ 学習課題：
 1. 事前課題「就寝前、起床時の体温を測定して記録する。1日の生活行動を記録する」
 2. 事後課題「自己の生活リズムと睡眠について、考察する。」
- ◆ オプション企画：活動量計を2週間装着し、睡眠分析の結果を個別に紙面で提供した。
- ◆ 住民からの評価（アンケート回収率92.2%）

<講義>とても有益だった：69.2%、まあまあ有益だった：30.8%

<グループワーク>とても有益だった：76.9%、まあまあ有益だった：19.2%

◆ 学生からの評価（アンケート回収率 100%）

<講義>とてもわかりやすかった：79.6%、まあまあわかりやすかった：19.4%

<グループワーク>とても有益だった：83.9%、まあまあ有益だった：16.1%

◆ 担当教員からの感想

本授業科目は1年生が初めに履修する技術演習科目で、「看護行為に共通する技術および健康的な日常生活行動を促進する基礎的な援助技術について、その知識と方法を習得する」ことをねらいとしている。「休息・睡眠を促す援助」の単元である本企画は、生体リズムに関する基礎的な知識を得て、ひとの健康生活の柱のひとつである「休養」の意義を理解し、異なる世代との交流を通して各々の生活リズムの特徴を知り、課題や工夫について共に考えることを目標に実施した。

グループワークは、住民さん1名と学生3~4名のグループを作り、学生の進行で行った。学習方法としてのグループワーク経験が少ないうえ、世代の異なる人とのコミュニケーションの機会が少ない学生達ではあるが、1グループの学生数を減らした（昨年までは6~7名）ことで意見を出しやすく、聴きやすい環境ができ、住民さんの協力を得て活発な情報交換がなされていた。学生は、多くの住民さんの生活リズムが規則的で、目的的な活動を生活の柱にしながら、社会活動を継続して日々充実した生活を送っていることを知り、自分たちとの違いに驚くと共に貴重な経験ができたと感じていた。また、その人の生活を理解することがひとを理解するために重要であることを実感し、同時に自分の生活を見直したいとふりかえる学生も多かった。住民さんからは以下のような感想をいただき、両者に有意義な企画であったと考える。

- ・ 睡眠についての認識を新たにしました。今後の生活の参考にしたい。
- ・ 基礎的なことが大変勉強になりました。
- ・ 若い世代の考え方や思いを少しでも直に触れることができ楽しかったです。
- ・ 初めての参加でしたが、素晴らしい学生さんに囲まれ、良い思い出、学習機会でした。

（以上、抜粋）

睡眠衛生の情報発信を広く行うことを目的に、住民参加者数を昨年までの倍に増やして実施した。募集を2段階に行ったため、オプション企画の実施時期も、第1次募集（須磨区）の希望者は7月、第2次募集（西区）の希望者は10月と2期に分かれた。そのため、個別の睡眠分析結果をプログラム当日に提示できたのは須磨区の参加者に対してのみであり、オプション企画の評価を授業評価アンケートに含めるのは困難であった。次年度は、オプション企画の評価を授業評価とは別に実施し、本プログラム全体の評価ができるよう改善したい。

（基盤看護学領域基礎看護学分野・准教授 柴田しおり）

【ヘルスプロモーション論】

- ◆ 教育内容：「アンチエイジングの科学～正しく知って行うために～」のテーマで、「抗加齢医学」における最新の知見についての講義を聴講し、日々の暮らしの中で加齢を感

じることや、老化予防として行っていることについて、教育ボランティアの意見を聴く。

- ◆ 対象学年・履修者数：1年生、編入3年生（必修・1単位）・101人
- ◆ 演習日：2016年12月20日（火）
- ◆ 演習場所：大学共同利用施設ユニティ
- ◆ 教育ボランティア参加人数：30人
- ◆ 学習課題：学生は6~7人1班となり、教育ボランティア2名から「老化予防」や「加齢」について、個別性に配慮して意見を聴く。レポート課題「健康に老いることは、どのようなことを考えるか？地域住民の方から学んだことをもとに、自分の考えを述べる」
- ◆ 学習の成果（学生レポートから一部抜粋）：

“これまで老いることはできることが減り、怖いものだと考えていた。しかしお話をうかがって、老いることによりできることは制限されるとは考えておらず、今を楽しく生きるというような考えを持っておられた。”

“教育ボランティアの方はとても若々しいと感じた。趣味を持つことで生活にも心にも潤いをもたらし、趣味を通じて文字を読む、人と関わり会話をする、自分で考えるということをするために、精神的に若く保てるのだと考えた。”
- ◆ 教育ボランティアからの評価

講義内容の満足度・・・「とても満足」15人、「まあ満足」8人

学生との意見交換の満足度・・・「とても満足」12人、「まあ満足」8人

参加しての意見・感想

「アンチエイジングの勉強になりました。若い方との交流で私も気分が若くなりました」「健やかに老いることについて、考えていきたい」



学生と教育ボランティアとの意見交換の様子

- ◆ 担当教員からの感想

ヘルスプロモーション論の講義の中で、「健康がその人の人生の中で創られていくこと」を様々な事例をもとに説明し、学生はそれらの事例や講義内容を振り返ったうえで、コラボ教育に臨んだ。「アンチエイジング」に関するテーマは、今の社会の中でも非常に興味のある話題となっていることもあり、科学的に健やかな老いに向けてどのようなことへの取り組みが望ましいのかについての講義は、教育ボランティアの方の学びも多かったようである。学生は、講義の後に50~80歳代の教育ボランティアの方から意見をお聞きし、「気持ちをしっかり持つこと」「生きがいを持つこと」などが、健やかに老いること

につながっていることを学ぶよい機会になったと思われる。(担当 加藤憲司, 相原洋子)

【健康生活支援学実習】

- 教育内容：地域で生活する人々の中で人と関わる力を養い、人々の生活と生活の場である地域を理解し、その人にとっての「健康」とは何かを考える。また人々が健康を維持・増進するための支援のあり方を考察する。
- 対象学年・履修者数：2年生・93人（6～8名が1グループとなり、地区ごとに実習を行う。H28年度は12グループで実施）
- 実習期間：2017年2月13日（月）～2月24日（金）
- 実習実施場所：学園都市、伊川谷、井吹台、長坂、須磨区竜が台、須磨区菅の台、西神西、桜ヶ丘、押部谷西、平野、神出
- 実習の具体的内容：グループ内で学生が2人1組になり、教育ボランティアとして登録された住民の自宅や活動の場を訪問し、生活や健康に関するインタビューを行うことで対象理解を深める。また、地区内を探索し、地区の特徴や社会資源を知る。さらに、グループ内で体験したことを共有し、意見交換を行うことで、地域と人々の生活や健康の維持・増進と地域との関連、人の価値観や健康観について考察を深める。
- 学生の学び：グループカンファレンスや合同カンファレンス資料から一部抜粋
 - ・同じ地区を見ても、若い世代、高齢者など世代によって感じ方が異なる。
 - ・インタビューをする中で、相手の言葉をそのまま受け取るのではなく、関心を持って質問したり、言葉の解釈を相手に確認することで理解が深まったり、ものごとを多面的に捉えることができる。
 - ・健康観は過去の経験や育ってきた環境が影響する。
 - ・健康観は人によってさまざまである。対象者の生活や価値観を通して健康観を捉えるが、自分の価値観を無視するのではなく、自分の価値観と対象者の価値観を照らし合わせて、出てきた疑問を対象者に問いかけることが対象者を知ることにつながる。
 - ・支援者として対象者を捉えるために、対象者を取り巻く環境を知り、見えないもの（価値観、人のつながり）を見る力を身につけ、その人の強みを知り、自分の価値観を知ることが必要。
 - ・健康とは、地域の人とつながりをもちながら、その人らしい生活を送ること。
 - ・価値観や言動を理解すると同時にその背景にあるものを理解する。背景を理解せずに価値観を否定したり、すべての行動を制限するような発言をしないことが支援を行ううえで大切。
 - ・積極的に介入することが支援ではなく、家族や地域で培われた健康観を尊重し、その人の強みを活かすこと、見守ることも支援である。
- 実習を通し、人の価値観、健康観の多様性を知ると同時に、それらが人生の歴史や生活背景と深く関わっていることに気づくことで、対象理解や支援のあり方についての学びにつながった。また、人の暮らしと健康が地域と密接に関わっていることを体験的に学び、今後、「地域の生活者」として看護を行う視点を学ぶことができたと考える。

2. 継続看護・訪問看護教育

神戸市における地域ケアシステム、在宅医療の連携システムの中で継続看護および訪問看護の実践者としての役割を果たせる人材の育成を目指して、本年度は4科目の概論・演習科目において実践者を招聘し、講義を行った。

実践者による講義科目と内容

| 科目名(単位) | 対象学年 | 開講日 | 講師(所属) | 講義内容 |
|-----------------------|------|-------|---------------------------------------|---|
| 慢性病看護学 概論 (1単位) | 2年生 | 7月1日 | 藤田愛氏 (北須磨訪問看護ステーション所長・慢性病看護学専門看護師) | 「在宅で療養生活を送る非がん疾患の病者と家族への支援について」 |
| 在宅看護概論 (1単位) | 2年生 | 1月26日 | 原田三奈子氏 (訪問看護ステーションすまあと管理者・訪問看護認定看護師) | 「訪問看護ステーションにおける運営管理について」 |
| 在宅看護論 (1単位) | 3年生 | 7月25日 | 吉田幸文氏 (訪問看護ステーションすまあと総括所長・作業療法士) | 「在宅ケアにおけるリハビリテーションと看護技術について」 |
| がん看護と緩和ケア (1単位) | 3年生 | 7月11日 | 梅田節子氏 (神戸市立医療センター中央市民病院・がん看護専門看護師) | ・緩和ケア外来看護師の立場から「通院中のがん患者および家族の継続支援」 ・緩和ケアチーム専従看護師の立場から「チーム医療と在宅移行支援」 |

継続看護に関する実習評価

継続看護に関する実習については、コラボ教育や継続看護についての講義を基盤にして、市民病院群や他の病院施設、保健センター、訪問看護ステーションなどの協力を得て7分野(基礎、老年、慢性、急性、精神、地域・在宅・訪問看護、小児)の看護の実習の中で実施している。COC事業では下記の継続看護の教育目標を各分野実習の中で共通目標を掲げ、継続看護の視点の強化を図っている。本報告は分野別実習での継続看護に関する体験目標項目について整理した。また、COC事業専任教員が総合実習のカンファレンスでの学生の意見から各分野での「継続看護」「他職種との連携」の評価として整理した。

●COC事業における継続看護教育目標

1. 地域における施設医療から在宅ケアまでの流れ(高度医療施設から一般病院へ、さらには在宅へ)を理解できる。
2. 退院から地域における生活の継続を考え、入院中に立てた退院後のケアプランが患者の地域での暮らしに合った内容や方法だったかどうかについて評価することができる。
3. 地域の人々の普段の生活や入院患者の退院後の生活を想像でき、施設内の看護ケアに留

まらず、退院後の生活者の視点から退院計画を立てることができる。

●各分野実習での共通目標

1. 地域における施設医療から在宅ケアまでの流れについて、システムや制度、継続的看護実践について理解できる。
2. 生活をイメージした退院時のケアを実践できる。
3. 他職種の役割や地域資源の活用について理解できる。

●各分野実習における体験項目

各科目において、継続看護の視点を養うための体験ができるようにしている。下記に一例を掲載する。

- ・地域連携推進室などの見学。
- ・退院指導、退院支援、退院前カンファレンスへの参加、サービス担当者会議等への参加。
- ・外来見学により、患者に対する継続的な看護を行なうためのシステムや方法を理解する。
- ・外出、受診、入所予定者の事前訪問への同行。
- ・地域活動支援センター、就労支援センター、グループホーム等の見学

●継続看護に関する体験目標項目と達成度

・基礎看護学実習

| 体験目標項目 | 対象学生の体験率 |
|-------------------------|----------|
| 地域連携推進室からの説明（新設項目） | 84.1% |
| 地域連携推進室などの見学 | 5.7% |
| 退院カンファレンスへの参加（受け持ち以外含む） | 24.5% |

・地域・在宅・訪問看護学実習

| 体験目標項目 | 対象学生の体験（率） |
|----------------------|---------------------|
| 保健センターにおける健康相談事業の体験 | 学生1名あたり1回（100%） |
| 地域包括支援センターにおける同行訪問人数 | 学生1名あたり 2.1件（100%） |
| 訪問看護ステーションにおける訪問件数 | 学生1名あたり 11.4件（100%） |
| サービス担当者会議参加人数 | 延べ 53人（67.9%） |
| 退院前カンファレンス参加人数 | 延べ 49人（11.5%） |

・老年看護学実習

| 体験目標項目 | 対象学生の体験率 |
|----------------------|----------|
| サービス担当者会議等への参加 | 35.8% |
| 外出、受診、入所予定者の事前訪問への同行 | 2.1% |

・精神看護学実習

| 体験目標項目 | 対象学生の体験率 |
|---|----------|
| 受け持ち患者が参加するプログラムでの地域活動支援センター、就労支援センター、グループホーム等の見学、および、利用者との交流会の参加、多職種の退院支援会議、退院前訪問看護師とのケア会議等への参加、学生カンファレンスでの共有。 | 100% |

・慢性看護学実習

| 体験目標項目 | 対象学生の体験率 |
|---------------------------------|----------|
| 受け持ち患者の退院指導、退院支援を行う | 60.3% |
| 受け持ち患者の多職種による退院前カンファレンスに参加する | 3.8% |
| 受け持ち患者以外でも地域連携室が関わる退院支援の場面に参加する | 44.9% |

・周手術期・クリティカルケア看護学実習

| 体験目標項目 | 対象学生の体験率 |
|---|----------|
| 転院・退院に向け、地域医療推進室が手術後の患者を支援する場面を見学する（見学できない学生はカンファレンスで共有）。 | 100% |

・小児看護学実習

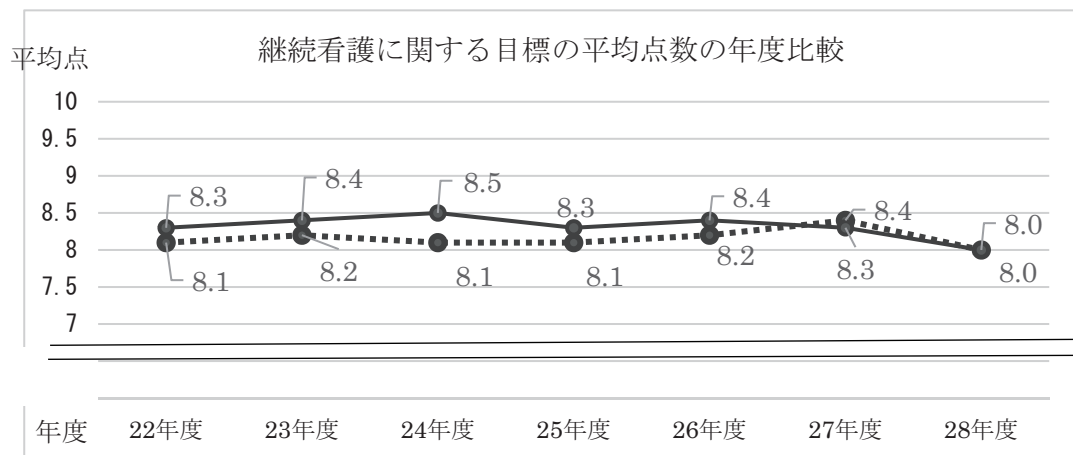
| 体験目標項目 | 対象学生の体験率 |
|----------------------|----------|
| 受け持ちの子どもに対して退院支援を行う。 | 100% |
| 1日の外来見学実習 | 100% |

●総合実習における学生の継続看護や多職種連携についての気づきや理解

カンファレンス記録から継続看護や他職種連携に関する学生の気づきや理解の記述を抽出し、キーワード別に整理した。以下、キーワードを記載する。

- ・情報収集やニーズの把握
（生活視点でのニーズの把握、地域情報からのニーズの把握）
- ・アセスメント視点
（地域での生活者として捉える、健康・生活面を把握し将来予測を立てる、患者やクライアントの意向を踏まえる）
- ・情報や支援方向の共有
（看護職間の連携、病棟と地域連携室の連携、他職種・他機関の連携、記録による連携、退院カンファレンスによる共有と確認）
- ・患者・クライアントの支援
（自己決定支援・セルフケアへのアプローチ、患者・クライアントへの情報や知識の提供、患者の不安や思いに寄り添うかかわり、家族支援）
- ・継続支援の評価（モニタリング）
- ・関係づくり（他職種・他機関との関係づくり、地域住民との関係づくり）
- ・地域連携室のかかわり
- ・他職種連携における看護職の役割
- ・看護師に求められる力
- ・その他

●総合実習の継続看護に関する目標項目についての平均値の推移



※ 目標項目は下記の通り、1項目あたり10点満点の平均点を掲載

| | |
|----|--|
| 実線 | 患者、クライアントの生活を支えるために継続的に提供される看護を学ぶ |
| 点線 | 患者、クライアントとその家族に関わる他職種との連携・協働を通して、保健・医療・福祉の総合的ケアのあり方と看護職の役割について学ぶ |

●まとめ

今回の集計では、基礎看護学実習と総合実習における継続看護に関する学びについてH27年度、28年度の年度比較を行ったが、基礎看護学実習、総合実習ともに、H27年度に比べH28年度は「十分達成した」の比率が減少している。しかし、継続看護に関する目標項目以外についても同様に減少していることから、学年ごとの特性の影響が考えられる。今後、継続看護に関するプログラムの効果測定を行うためには、入学時の学生の学力をはじめ、他の必要な要素を加味した上でアウトカムの出し方を検討する必要があると考える。

また、分野別実習における体験目標項目については、「地域連携室の見学」「退院前カンファレンスへの参加」「受け持ち患者の退院指導、退院支援、退院前カンファレンス」「他職種とのケア会議、サービス担当者会議への参加」「他部門、他機関の見学、参加、体験」が設定されている。分野の特性によってそれぞれの体験内容は異なるが、今後分野間で体験項目や体験内容を共有していくことで、学生がさらに効果的に体験を重ねることができると考える。

(報告者：地域連携教育・研究センター 石井久仁子)

3. 大学院教育

【コラボレーション看護論】

- ◆ 履修者数：大学院博士前期課程 1、2 年生 9 人（聴講生 2 人）
- ◆ 内容：チーム医療に関する考え方を学び、医療機関内の連携だけでなく、医療機関の間での連携や医療機関と地域との連携を推進していくために必要な看護師の役割や看護管理のあり方、連携能力の育成に関わる看護教育について、エキスパートからの講義を受講し、討議・考察する。

<実践者からの講義>

- ①「緩和ケアチームの活動」 梅田節子看護師
(神戸市立医療センター中央市民病院 緩和ケアチーム専従、がん看護専門看護師)
- ②「NST チーム（栄養サポートチーム）の活動について」 北川恵看護師
(西神戸医療センター NST 専門療法士)
- ③「せん妄ケアチーム活動を通してコラボレーションを考える」 伊藤聡子看護師
(神戸市立医療センター中央市民病院 急性・重症患者看護専門看護師)
- ④「シームレスな医療・看護を提供するための地域連携のあり方」 宇野さつき看護師
(新国内科医院 看護師長)
- ⑤「看看連携を推進するためのネットワークづくり」 三輪恭子看護師
(よどきり医療と介護のまちづくり株式会社 地域看護専門看護師)

- ◆ 授業最終コマで、「急性期医療におけるチーム医療、地域・在宅領域における多職種との協働を推進するための看護師に求められる能力」について、授業で学んだ内容をもとに議論を行った。

～事例と検討内容～

- 事例 1. 60 代、アルツハイマー型認知症末期、嚥下障害があり、コミュニケーションがとれない方。
“精神科医と主治医の連携のもと、在宅医につなげるようにする。家族の不安に対し、精神科医のコンサルテーションを提案。医師、訪問看護師、ケアマネージャー、本人、家族をチームとし、在宅医療に向けた調整を行なう”ことが求められる。
- 事例 2. 50 代、肺がんステージ 4、独居の方。
“予後予測を行い、入院中の早い段階から在宅医療への希望を確認することで、地域との調整をスムーズに行える。地域連携室と病棟との情報共有を行ない、伝えるべきことは地域連携室に伝えることが求められる。”
- 事例 3. 30 代、精神疾患を有しており薬剤多量内服により救急搬送・再入院を繰り返している。
“救急病棟では地域連携との関わりが少ないため、再入院に至る情報が十分に得られていない。また医師を中心に救命・救急治療が行われているために、スタッフ間の情報共有も少ないことから、病棟内、病棟と地域連携との情報共有を行なえるような場を持ち、地域資源の検討など、地域での暮らしを支援できる関わりが求められる。”